

総合教育センター・チャレンジセンター 合同FD研究会

実施報告

日時： 2015年12月9日（水） 17:00～18:00

場所： 東海大学湘南キャンパス

参加者： 総合教育センター 13名
チャレンジセンター 7名
チャレンジセンター推進室 1名
工学部土木工学科 杉山太宏 教授
法学部法律学科 池田良彦 教授
外国語教育センター 結城健太郎 講師

イントロダクション

チャレンジセンター 堀本麻由子

- 今日の研究会では「100人規模の授業でPA型教育は可能か」という問題意識に沿って議論の素材を提供したい
- 2018年度から開始される新カリキュラムでは区分2では、PA型3科目、シティズンシップ、ボランティアの開講が予定されている。また、区分5においては、PA型演習科目として資料に提示している科目が予定されている。さらに、学部での授業においてもPA型授業を取り入れていく方向で考えている。
- 学生に対しては、4年間でPAの中で大切にしていることを理解して実行してもらうことを目指している。このような状況で、科目をこれから考えていかなければならない
- PAの中でもっとも大切にしていること、コアコンセプトは
 - 1) 若者自らが社会を創造することを意識したものであること(民主主義)。
 - 2) 多様性を前提とした問題解決をできるようになること。(多様性)
 - 3) フリースペースといわれる自分たちの居場所、地域へ参画できる場所、スキルを生み出していくの3つが挙げられる。
- PA型授業を考える上で2つのアプローチが可能ではないか：
 - 1) 授業テーマ、主題の観点からどのような授業を組み立てるか
 - 2) 授業方法、教育方法の観点からの検討という2方向から考えていく必要がある。

区分2だけで、これらのすべてを理解することは難しく、3科目は、学生が今後、東海大学で学習していく上でのイントロダクションの役割を担うと考える。

これまで2年間にわたる議論の中で現状ではPAについて誤解がある

- 1) PA＝アクティブラーニングという誤解。手法にばかり注目されがちだが、PA教育を浸透させるためにアクティブラーニングが有効ではあるものの、これがすべてではない。コアコンセプトが共有されれば学習形態に縛られなくてもよい。これらについては今後も議論を続けていく必要があると考えている。
- 2) PAは専門家でなければ科目を担当が難しいという誤解がある
8月に行ったドノヴァン先生の研修でも強調されていたのが「市民的専門家」という立場であり、高等教育ではこの「市民的専門家」の育成が目的となっており、それは、教員各自の専門分野の公的意味、意義をきちんと教える、アピールの機会として捉え、特定の専門分野ではなく、すべての教員が資格を有しているものであると説明されていたことを、認識してもらいたい。

【事例報告1】「挑み力（入門）」での授業実践の紹介

チャレンジセンター非常勤講師 富永貴公先生

- 先ほどの説明でもあったとおり、特定の専門ということではなく、担当者の専門である社会教育、生涯学習の視点からシラバスを作成している。テーマは「市民社会の形成に基づく学習」として、社会教育、生涯教育の視点からこの市民社会をどのように形成していくかを考えるという内容になっている。
- 学習の到達目標は、・社会教育の制度的な条件を理解する、・広い社会的文脈の中で社会教育の課題を理解し、（具体的な学習課題への理解）学習方法を考えることを設定している。
- PAで、社会の問題を捉え、考えていく上で知識は必要であることが指摘されており、この授業においても、問題を捉えるための枠組みとなる知識、求められる教養の習得(特にシティズンシップ、社会教育・生涯学習、学校・地域・家庭の連携、がキーワード)を重要視している。そのため、社会を創造するために必要な教養、知識の確認を授業のはじめに行う。このことから、授業前半では、制度、理念にかかわる話をした上で、グループ討議を行う。背景には、発達心理学や教育的な枠組みを中心に進めている。公判は、より身近な、具体的なトピック、課題を自ら考えていくような内容を展開している。例えば、第8回では、アイデンティティの獲得と青少年というテーマで、ゆとり教育について取り上げ、学生に「ゆとり教育」を切り口に、自分が受けた教育を振り返ってもらおう。また、ジェンダーと教育というテーマで行った授業では、ジェンダーの概念の説明から行い、より身近な問題として、デートDVなどを取り上げ、教育課題を考える内容を行っている。また、セクシャルマイノリティ（レズビアン、ゲイ、バイセクシャル等）の学校や家庭、教育の場面でどのような経験をしているのかを踏まえ、教育課題として取り上げている。
- 毎授業、ワークシートを設け、学生が授業内容を受けて記入したワークシートの内容を、その後の授業で紹介している。他にもワークシートは、記入後、音読をさせたり、リアクションを記入してもらおうなどの取り組みを合わせて行っている。・ワークシートは、授業の内容に則しながら設定している。講義内で取り上げるテーマは具体的に設定しているが、経験の有無やテーマとの距離感に関係なく、自らの問題として考えることができるような工夫を行っている。具体的には、「デートDVに対して、あなたができることはなんですか」などである。これは、アクティブ・シティズンシップという視点を意識したもので、「市民社会を形成する上で、何が自分にできるのか」を実際に取り組める身近なことから考えてもらうようにワークシートを設定している。これらに対する学生のワークシート記入例を踏まえながら、
- ワークシートは、毎回、個人またはペアを作ってもらい、相互にリアクションを記入しあうなどの効果的な取り組みも行っており、ペアで行う場合は、異なるほぼ初対面の学生とペアを作るよう所属や学籍番号等で条件を付加し、楽しみながら学生の参加意欲を引き出している。学生にリアクションを記入してもらうことで、学生間の理解を深めるだけでなく、他者に自分の意見を受容してもらおう経験にもなり、教員が添削するよりも、学生間でコメントし合う方が、多くの学習があるように思われる。この授業では、このワークシートの作成に重点を置いて行っている。ワークシート作成当初は、何かできることはないといった消極的な振り返りが見られることもあるが、繰り返し様々なテーマについて考え、ワークシートの記入を行っていくと、より積極的なコメントが増えていく。見えてきた課題は2点あり、「挑み力」という科目は多数開講されており、今回取り組んだシティズンシップに関する授業とほかの挑み力の授業との関係について考えてみたい。
- 学生の主体性を引き出し、自分ができることを表現させた後、それを演習型授業に接続するのが今後の課題である。

【質疑】

（崔先生）講義のテーマとしてシティズンシップを取り上げられているが、シティズンシップについて、どのようなタイミングで説明しているのか

→(富永) 授業の冒頭で、基本的な概念等の説明は行っている。ただ、各回確認するというよりも、毎回のテーマに基づいてシティズンシップとは何かを考えてもらい、最終的な段階で、生涯学習においてシティズンシップとはどのようなものかを考えてもらうようにしている。

【事例報告2】「成し遂げ力（入門）」での授業実践の紹介

チャレンジセンター 崔一煥
 チャレンジセンター 岡田工

- 現在「成し遂げ力入門」という科目の中でパブリック・アチーブメント科目の実践を行っている。今回の報告では、シラバスの紹介とこの授業の特徴である「スマートフォン」を使った授業の取り組みの報告を中心に行う。スマートフォンを活用する点が実践上の特色であり、出席、資料の配布等、スマートフォンを用いて行っており、紙を使うことは極めて少ない。
- この授業のテーマは「地域理解とシティズンシップ」であり、PA科目4つのうちの2つを足したものとなっている。シラバスは担当者が作成したものではなく、新カリ科目のワーキンググループで作成された案をそのまま使用している。担当者は工学部の出身であり、この分野については素人であるため、シラバスでは、ワーキンググループの案をそのまま活用した。
- 授業では、スライドなどもPDF化し、公開しており、学生は見るようにしている。実践を行っている科目は「成し遂げ力」という科目であるため、「地域理解とシティズンシップを通して社会で活躍するための実践力を養う」と説明し、地域の内容に入っていく。授業の概要もすべてワーキンググループで検討、作成いただいたものである。市民としてこれから要求される地域社会で、市民として活動、生活していく上で、どのような資質が必要であり、どのようなところに参加しながら、より良い地域を作っていくのかという観点で説明を行っている。授業前半の地域理解の部分では、今回は秦野市を取り上げた。秦野市のHPから、いろいろなデータを紹介し、To-Collabo等で行われている内容を加味しながら、秦野市の特徴等を学生に説明している。現在、後半部分のシティズンシップの分野が始まったところであり、シティズンシップの概念等の説明を行い、今後、学生が地域からどのような期待をされているのかにつなげていきたい。しかし、シティズンシップ等の概念を言葉で説明することは難しく、文献に示されている様々な定義をそのまま紹介しても学生にも理解が難しい。その上で、なるべくわかりやすくなるように「シティズンシップとは、住民として市民として受けられる権利と最近加わった市民としての義務」であるとし、社会的に期待されていることや社会的義務とは何かという観点から講義を行っている。その上で、将来、自分が関係する地域の活性化を成し遂げる力を身につけると説明している。

到達目標は、地域を理解する。地域の課題、公的な問題を扱うことができるようにするための、シティズンシップの考え方、精神を理解する。社会共同参画する。を到達目標にしている。学生には、地元や関係する地域を念頭において考えるようにして授業に参加するよう促している。授業のスケジュールでは、最初にガイダンスを行い、この際、この授業でスマートフォンを100%使うことを説明し、スマートフォンを使えない場合は実習室のパソコンを用いることができる旨説明を行うが、スマートフォンをほとんどの学生が保持しており、これまでそれに関して特にトラブルも起こっていない。

ガイダンスに続いて、アイスブレイクを行った。履修者が93名いる中で、できるだけ多くの人とお話できるようなゲーム方式のアイスブレイクを行った。その上で、秦野市の人口などデータを使って話を進めたが、その際に、全体の人口推移に加え、高齢者、生産年齢、子供の人口の現状などをグラフ等を使って説明し、意識できるようにしている。これらの人口に産業がどのような影響を及ぼしているのか等、背景の説明も行っている。地域連携活動についての事例については、To-Collabo等で行われているものを紹介し大根地区での防災対策の活動等を説明している。その後、学生には、自分の住んでいる地域における課題を3つ程度考えてもらう宿題を出し、その次の週から、ランダムに分けた5人程度のグループで自分たちの地域での課題を共有し、グループで最も関心のあるテーマを選び、その解決策を模索するグループワークを行った。この結果については、全18グループが各3分ずつで発表を行った。発表後、授業支援システムを使って、最も良かったグループのアンケート調査を行った。その後中間テストを行い、今週からシティズンシップの授業に入ったところである。ほぼ毎回、授業支援システムにテキスト入力の形で振り返りを行い、そのワークシートの点数と途中の課題で成績全体の50%、中間、期末試験の点数で全体の50%となるようにしている。

続いて、授業支援システム、スマートフォンを使った授業における取り組みを中心に報告する。まず、授業支援システムを使った振り返りの提出では、授業時間内に提出ができない学生についても、授業日の24時まで記入ができるよう設定しており、自宅に戻ってから記入することもできるようにしている。他にも、出席、資料配布も授業支援システムを用いて行うことで、少しでも便利になる点があるのではないかとこの取り組みを行っている。特に今回、スマートフォン、授業支援システムを使ったグループワーク、発表における活用方法を中心にお話する。スマートフォン上で授業支援システムを操作できるため、基本的に教員がスクリーンに提示する内容と同じもの事前に授業支援システムにアップロードしておくことで、多数の学生が履修する授業であっても、後方席の学生でもスマートフォンを使って資料を確認できるようにしている。同様に、振り返りの項目を開くと、テキストボックスが表示され、学生はスマートフォンから直接振り返りを入力できるようになっている。

授業支援システムのテキスト入力では、文字数の制限が可能で、あえて文字数制限をすることで、反対にある程度の文字数が最低限必要であることを示すことができ、結果として、しっかり書いてくる。多くの学生は、スマートフォンで速やかに振り返りを記入している。

さらに、今回は90名を越える多数の履修者を5人一組18グループに教員側からランダムに分け、グループワークを行った。自己紹介、グループ名やグラドルールを作ったり、グループでの写真を撮ったりして、グループを共有化し、グループを意識できるようにしている。さらに、配布資料等をデジタル化することは、配布の手間を節約することが一番の狙いになっている。発表に向けては、1週を使ってテーマを決め、発表の準備として1週設け、その後3週目に発表を行った。全部のグループの発表を1コマで行うことは非常に難しく、発表資料については、紙ベースで作成してもらいそれをスマートフォンで撮影しながら発表させた。今回の発表テーマは、地域を決めてもらい、その地域にどのような問題があるかを発表してもらった。その発表のフィードバックについては、各グループすべての記入は難しいことから相互評価のアンケート機能を使って、最も良かった班を挙げさせ、その理由とともに記入をさせた。アンケート機能を用いたことから、学生の評価結果がグラフで表示され、分かりやすく提示することができた。さらに、学生のコメントを相互確認できるようにすることが可能で、学生同士がコメントを確認できる点も有効な取り組みであった。

今回、履修者の多い授業で、スマートフォンを使った発表のトライアルを行ってみて、それぞれ発表させるということは非常に良いことだということが分かった。100規模の授業での発表は様々な困難が予想されていたが、発表させるという経験がつきながら、これを継続し、この授業後半でも同様に全グループでの発表を試みる予定である。

【ディスカッション】

ファシリテーター チャレンジセンター堀本麻由子

- (結城) 今回の授業のシラバスは、モデル的なもので、この中に地域理解、シティズンシップ的なものが含まれているという理解でよいのか?…(岡田)はい、そのとおりです。前半は地域理解を考えた内容で、後半をシティズンシップを考えた内容としている。その二つを組み合わせただけのもので、実際の運用では、地域理解、シティズンシップも半分の回数で実践する予定としていることからそれを足した形で試行を行った。
- (杉山) 中間、期末の試験はどのような形式の問題なのか?…(崔) 講義で扱った知識を尋ねる問題、またはグラフを読んで簡単な計算を行わせる問題など。平均点は70点以上。
- (松本) 授業内容のどの点が「挑み力」という科目名とリンクするのか?…(富永) 「挑み」を支える仕組みとしての生涯学習社会、という問題意識をもって臨んでいる。
- (前田) アクティブ・シティズンシップを掲げて行う活動については副作用や弊害が多々指摘されている。その点について考えがあれば伺いたい。シティズンシップを掲げるほどかえって参入障壁が高くなる弊害について。専門家としての見識と、実際の授業での対応について。…(富永) シティズンシップという概念そのものでハードルが上がっていると思う。必要最小限の知識提供にとどめ、具体的かつ身近な問題に学生は導くようにしている。マイノリティの問題については、各問題群がたがいに齟齬をきたす場面もある。例えば、障害とジェンダーなど。その場合、画一的な答えを与えるのではなく、学生各自の意見を持つようサポートするようにしている。
- (佐藤) 成績評価について。学習の到達目標を、実際の授業で成績評価に反映させることが2010年度カリキュラム以降求められていると思われる。今日の報告ではその点が十分に理解できなかったように思う。…(崔) 今の段階ではその点は十分に授業実践に反映できていない。ルーブリック作成等は今後の課題。(富永) 到達目標と試験には一定の連動性を持たせている。…(木村) PA型教育では成績評価がもっとも難しいと思われる。ひとつの考え方として、学生による相互評価も加点の対象にしてもよいのではないかと考える。
- (石原) 授業への参加をアクティブにすることと、市民社会への参加をアクティブにすることが、今日の話では連動しているように思われた。ただし、そうだとすると、市民社会を成立させている社会制度そのものを問う視点も必要かもしれないとも考えた。
- (園田) PA型授業の取り組みが今日のテーマなので、どの点が自分の授業でのパブリック・アチーブメントなのかを知りたい。…(富永) 社会的諸課題について身近に感じてこなかった学生たちに、自分にも行動を起こせるという能動性に気づかせている点がPAだと考える。(崔) 授業では学生たちに情報提供をするにとどめ、参加や実践は学生にゆだねている。(岡田) 最終的には学生が地域に出て活動する、卒業後に学生が市民社会に参加することが最終目標で、そのきっかけを授業で提供している点がPAになっていると考える。